

第1章 久慈川流域の概要

(1) 河川の概要

久慈川は水源を茨城・福島・栃木3県の境界に位置する八溝山(標高1,022m)に発し、山間部を北東に流れて福島県東白川郡棚倉町に至り、これより方向を一転して南流し八溝山脈と阿武隈山脈との間の狭長な平野を流れて茨城県に入り、山間狭窄部を経て常陸大宮市(旧山方町)に至って両岸が開け、次第に流路を南から東に変じ右支川玉川・左支川浅川・山田川・里川を合せJR常磐線鉄道橋の下流の日立市、東海村の境を経て太平洋に注いでいる。

流域面積は1,490km²、幹川流路延長は124kmで、全国109水系の一級河川の中ではそれぞれ45番目、35番目に相当する規模を有し、関東地方の最北部に位置する河川である。

久慈川流域の大部分は山地であるが、下流部は肥沃な平野をなし農産物の生産が多く、河口に近い下流部右岸は原子力研究所のある東海村があり、また左岸は日立工業地帯を有する日立市が位置しており、茨城県北部の社会、経済の基盤をなしている。

久慈川の自然環境については、流域内に奥久慈(福島県・茨城県)、太田、高鈴、花園花貫の5つの県立自然公園があり、久慈川流域の上流域が山地であるのに対して、中下流域は肥沃な田園地帯であり、緑豊かな地域が形成されている。都市地域は、河口部の日立市、東海村、常陸太田市等があるが、地目別土地利用面積では久慈川の流域面積1,490km²のうち宅地が4.8%、田畑が16.4%で、山林は55.8%と流域の大半を占め、久慈川流域の自然環境は概して豊かである。

直轄管理区間を対象に実施されている河川水辺の国勢調査(平成8年度陸上昆虫類調査、平成9年度植物調査、平成12年度魚類・底生動物調査、平成13年度鳥類・両生類・爬虫類・哺乳類調査)によれば、魚類7種、底生動物7種、植物13種、鳥類16種、哺乳類1種、陸上昆虫類11種と多くの保全上重要な動植物の生息が確認されている(両生類・爬虫類については保全上重要な動物は確認されていない)。

久慈川において発生した水害の歴史を見ると、宝永元年(1704)の記録が最も古いものとされている。江戸時代から現在まで数年から数十年に一度は大洪水により大きな被害が発生している。中でも大正9年の洪水では久慈川および支川で堤防が決壊し沿川は泥海と化し、死者・行方不明90人、家屋流出206戸、全・半壊273戸、床上浸水5,618戸の甚大な被害をもたらした。

久慈川の抜本的な治水対策は度重なる大水害を受けて、国の直轄事業として始まった。大正9年の洪水に基づき、里川合流点から下流の計画高水流量を4,000m³/sとし、昭和13年里川合流点付近の改修に着手した。その後、昭和41年に一級河川の指定並びに工事実施基本計画の策定(昭和49年改定)に基づいて河川整備が実施されている。近年では昭和57年9月、61年8月、平成3年9月、11年7月と連続して水害に見舞われ各所で家屋や田畑の浸水など被害が生じている。

久慈川の利水については、古くより行われているが本格的な利水が行われるようになったのは、江戸時代の新田開発からであり、水戸藩によりかんがい計画が立てられた。辰ノ口、岩崎、茅根、田渡、里野宮堰の建設や農業用水路の開削が行われ、沿川地域の農業用水として広域に配水された。現在では、久慈川の水利利用(直轄管理区間)は25の水利権に対し約14m³/sの水を供給し、農業用水、水道用水、工業用水等として沿川地域の社会経済を支えている。

久慈川のレクリエーション利用は、アユ釣りの名所として、また散策、河川敷でスポーツの場所等として活発に利用されている。中上流の河原等では、水遊び、釣り、散策、バードウォッチング等に利用されている。中下流部の河川敷では公園・グラウンド等も整備され、河口部付近で

は広い水面を利用して水上バイクなどのマリンスポーツが行われている。

また漁業については、アユ、サケ漁等が昔から行なわれており、様々な伝統漁法も残され、現在でも盛んに行なわれている。

表 1-1 久慈川本川と本川に流入する支川名と流路延長

河川名	流路延長	河川名	流路延長
久慈川本川	124.0km	滝川	12.0km
├ 白子川	10.3km	├ 大野川	10.0km
├ 大竹川	8.2km	├ 大沢川	10.9km
├ 大草川	11.0km	├ 湯沢川	5.2km
│ └ 根子屋川	3.0km	├ 久隆川	8.4km
│ └ 檜木川	3.6km	├ 諸沢川	0.5km
├ 近津川	10.0km	├ 枇杷川	8.2km
│ └ 小山田川	4.0km	├ 玉川	20.0km
│ └ 宮川	6.4km	│ └ 照田川	5.6km
│ └ 滑川	5.0km	├ 浅川	23.9km
├ 稲沢川	4.0km	│ └ 赤土川	5.5km
├ 川上川	15.0km	│ └ 千寿川	4.9km
│ └ 那倉川	11.2km	├ 山田川	37.8km
│ └ 渡瀬川	19.4km	│ └ 竜神川	12.5km
│ └ 赤坂川	9.5km	│ └ 染川	7.9km
│ └ 西川	2.8km	│ └ 湯の沢川	3.6km
├ 大内沢川	5.0km	├ 里川	51.4km
├ 中川	2.1km	│ └ 天竜川	6.3km
├ 小田川	10.0km	│ └ 入四間川	7.4km
├ 矢祭川	18.3km	│ └ 源氏川	15.8km
├ 八溝川	20.8km	│ └ 渋江川	8.0km
│ └ 中郷川	7.1km	├ 茂宮川	15.0km
├ 押川	27.4km	│ └ 高貫川	6.0km
│ └ 大道沢川	3.6km	│ └ 亀作川	5.6km
│ └ 相川	9.0km	│ └ 弁天川	6.2km
│ └ 久保田川	5.5km		
│ └ 初原川	15.6km		
└ 浅川	13.2km		

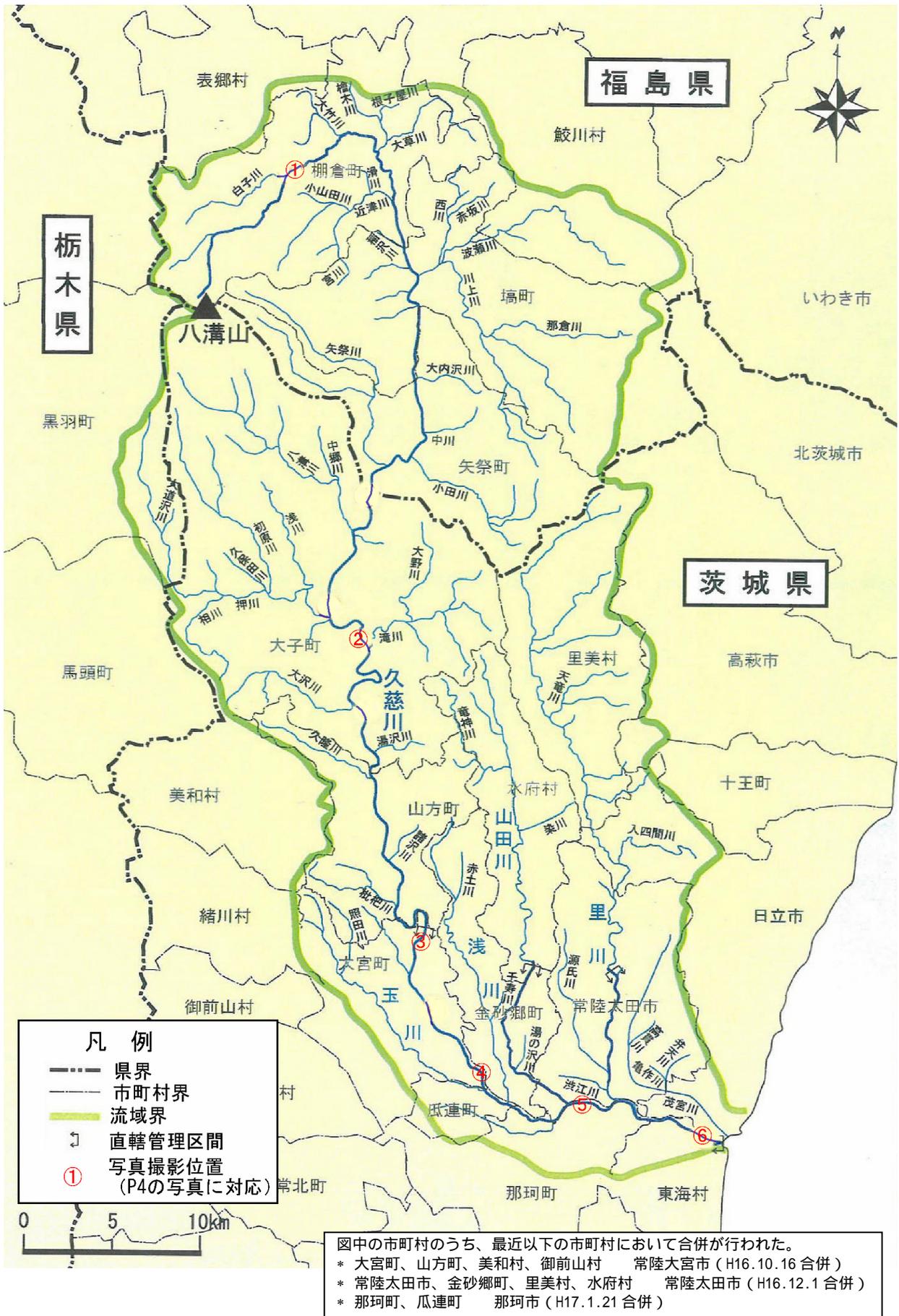


図 1-1 久慈川流域の河川



102km 付近 谷底平野を流れる（棚倉町）



51km 付近 南田気の湾曲部（大子町）
上流域の下流部はこうした蛇行が特色



31km 付近 大きく蛇行しながら流れる（常陸大宮市）。これより平野部に入り直線的な河道となって流れる。



23km 久慈川の低地と段丘が広がる
（常陸大宮市～常陸太田市）



12km 付近 山田川合流点上流（常陸太田市）



久慈川河口（日立市・東海村）

図 1-2 上流～下流の久慈川の様子

（～：平成12年10月撮影 ～：平成15年11月撮影）

(2) 地形と地質

1) 地形

久慈河流域の地形を山地・丘陵地・台地・低地に分類すると、流域面積の80%は八溝山地と阿武隈山地による山地・丘陵地で占められており、約20%が台地・低地の平野部である。

久慈川と那珂川に挟まれた那珂台地は、両川の侵食と堆積、および海進と海退の繰り返しの結果形成された河岸段丘である。久慈川では、右岸側に河岸段丘が発達しているが、左岸側には大きな段丘は見られない。

山地から流下した久慈川は、中流部に規模の小さい扇状地を形成している。

浅川、山田川との合流点付近より下流域は沖積層による低地である。この低地の中を、久慈川は大きく蛇行をくり返し、侵食と堆積を行い沖積平野には自然堤防、後背湿地、河跡湖、旧河道などの微地形を残している。

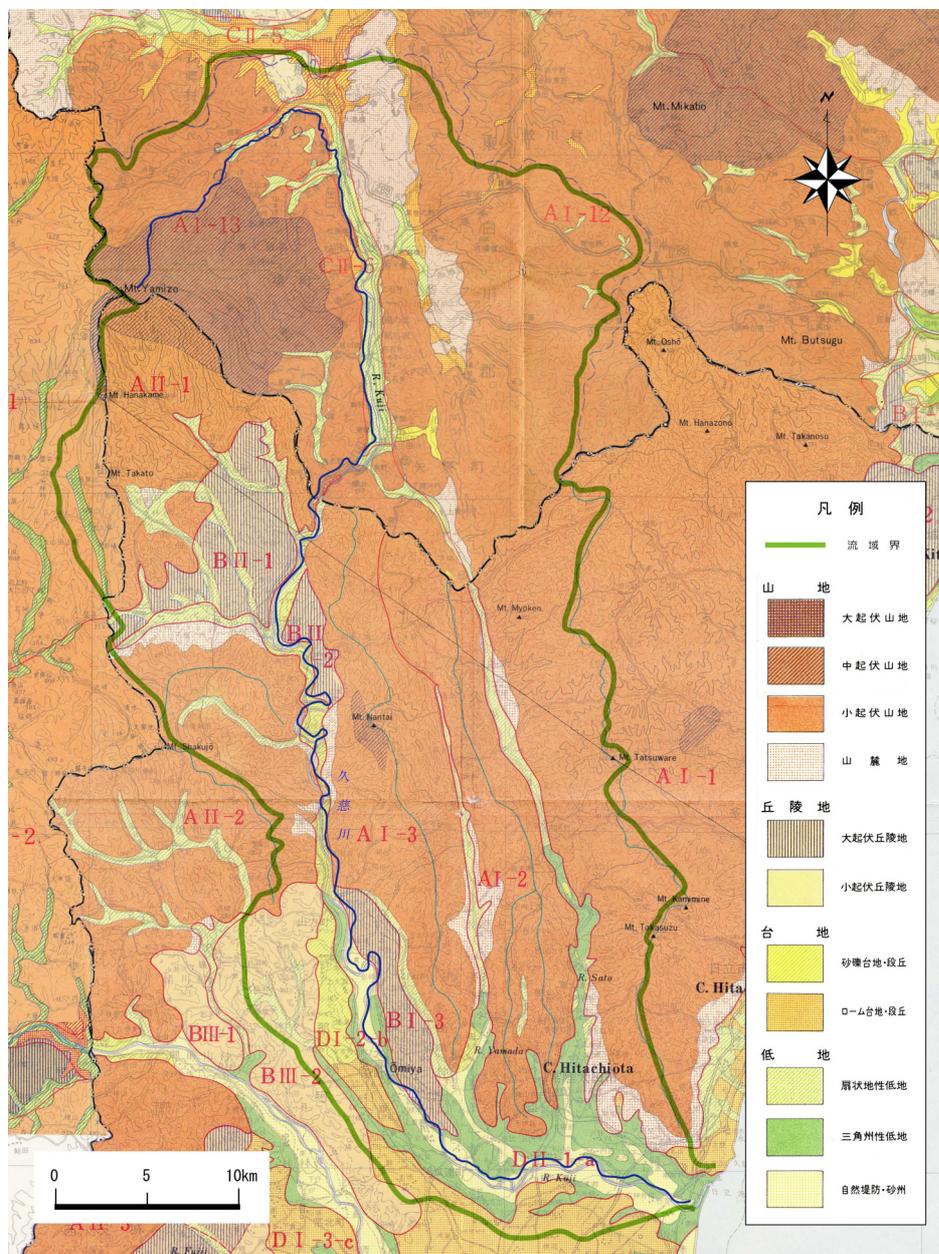


図 1-3 久慈川流域の地形

(国土庁,「土地分類図 07(福島県),08(茨城県),09(栃木県)」をもとに作成)

2) 地質

久慈川流域には、日本列島の最古と想定される地層から、最も新しい沖積層の地層まで様々な地層が分布している。久慈川の流域の地質は地質構造上から次の5つに区分され、里川、山田川、八溝川では全く異なる地質に遭遇する。

- ・ 里川より東側の多賀山地（阿武隈山地南端）の地質
- ・ 久慈川本川より西側の八溝山地とその周辺の地質
- ・ 久慈川本川と里川に挟まれた久慈山地（阿武隈山地南端）の地質
- ・ 久慈川右岸の那珂台地の地質
- ・ 久慈川下流域の低地の地質

里川より東側の多賀山地（阿武隈山地南端）の地質

里川と鹿島灘の間に大きく広がる阿武隈山地の南域は、主として中生代に貫入した花崗岩類と古生代の変成岩類により構成されている。

変成岩類は、片麻岩、結晶片岩を主体とし、先カンブリア紀と言われる非常に古い地質時代の堆積層が、その後起きた火成活動により変成作用を受けたものである。

花崗岩類は花崗閃緑岩、雲母花崗岩を主体とし、中生代白亜紀の火成活動により貫入し、山地の中央部に広く分布している。

多賀山地には、日立古生層と呼ばれる古生代（石炭紀～二畳紀）の地層が分布している。この地層には銅鉱床が胚胎し、日立鉱山や諏訪鉱山がこれらを採掘していた。

久慈川本川より西側の八溝山地とその周辺の地質

八溝山地のうち流域内の八溝山塊、鷲の子山塊の脊梁を形成する地質は、八溝層群と呼ばれ、砂岩、頁岩、凝灰岩、チャートなどである。古生代末期～中生代に海に堆積した泥や砂が固結したものである。

八溝層群からはアンモナイト、さんご、海百合など、暖かい海に棲む生物の化石が見つまっている。

久慈川本川と里川に挟まれた久慈山地（阿武隈山地南端）の地質

久慈山地の中央部には新第三紀 中新世（約2000万年前）の比較的新しい地層が分布している。この時代、日本列島では、グリーンタフ活動と呼ばれる激しい海底火山の噴火活動が行われ、このときの火山噴出物などが海底に堆積したのが、この地に見られる砂岩、頁岩、凝灰岩などの地層である。

グリーンタフ活動と同時に、里川、山田川地域では大規模な断層活動が繰り返され、大きな破砕帯が形成された。これは棚倉破砕帯と呼ばれている。棚倉破砕帯は幅2～5km、延長10kmにわたって見られる。この時期に現在の日本列島の骨格が形成されたが、棚倉破砕帯は本州を縦断する中央構造線と並ぶ重要な役割をした構造線といえる。

久慈川右岸の那珂台地の地質

那珂台地は標高が25m～90mで、久慈川側には急傾斜の比高20～25mの段丘崖が形成されている。那珂台地の地質は久慈川及び那珂川の礫、砂による河岸段丘堆積物であり、表層部には関東ローム層が堆積している。

久慈川下流域の低地の地質

沖積世初期（約 6000 年前）には、海面上昇（縄文海進）により現在より数m海面が高かった。その後海面は下がり、現在の久慈川や那珂川下流域の低地の地形が出来あがっている。縄文海進のときに刻まれた河谷の底や久慈川の河底に堆積した細粒のシルトや粘土が、現在の低地を作っている。

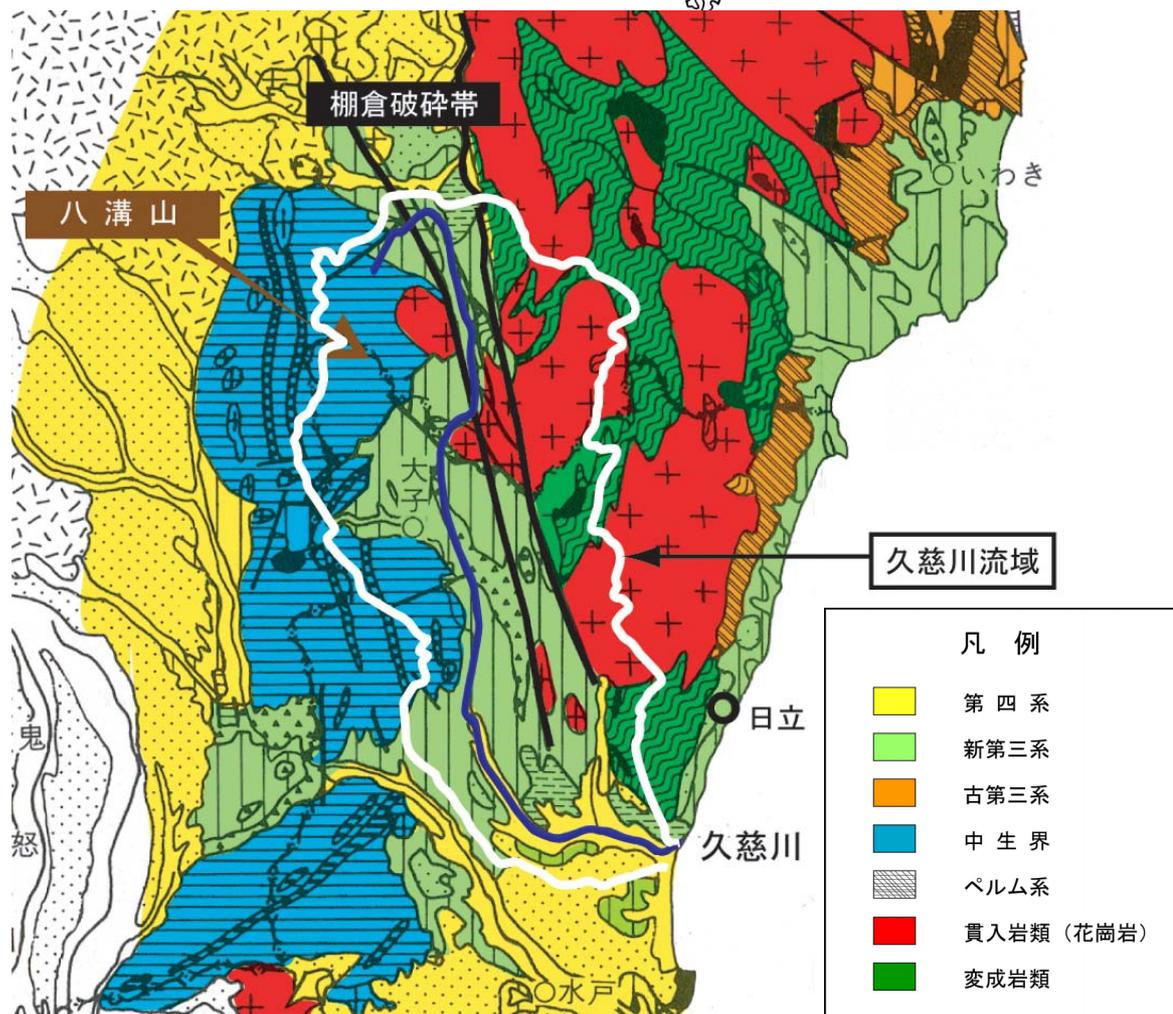
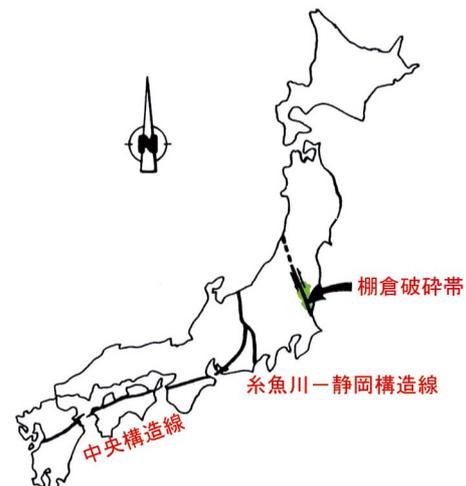


図 1-4 久慈川流域の地質

(日本の地質『関東地方』編集委員会, 『日本の地質 3 関東地方』をもとに作成)

まだら石

常陸太田市町屋の里川の河原では「まだら石」と呼ばれている美しい模様をもった石を見つけることができる。これは日立変成岩の中に貫入した蛇紋岩が砂利や玉石になったものである。蛇紋岩独特の暗緑色や黒色の中に、白色のまだら模様が転々とあり、その模様が笹やもみじや牡丹の花のように見えることから「まだら石」と呼ばれ珍重されている。

(3) 気象

1) 降水量

久慈河流域の気候は、典型的な太平洋気候型に属し、降水量は梅雨期から台風期にかけて多く6～9月の4ヶ月で年降水量の50%に達する。

流域内に位置する大子観測所の年平均降水量は1,480mm程度で、わが国の平均1,718mm、関東地方の平均1,551mmに比べ降雨量は少ない。

地域別にみると上流域の八溝山地に多く、その他は大差ない。

2) 気温

久慈河流域内にある大子観測所の気温で見ると、年平均気温は12.3で、月別平均気温の最高は8月で24.6、最低は1月で0.3である。

内陸部(大子観測所)の気温は、太平洋側(日立・水戸観測所)の気温と比べ、冬期には3～4低い。

表 1-2 久慈河流域月別気温・降水量(平成2年～平成11年の平均)(単位 気温:℃、降水量:mm)

		1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	通年
日立	気温	4.5	4.8	7.2	12.2	16.0	19.1	22.9	24.6	21.7	16.9	12.1	7.5	14.1
	降水量	47.0	61.2	114.4	132.1	166.6	161.4	148.0	127.8	221.3	152.9	97.0	30.7	1460.4
大子	気温	0.3	1.6	5.2	10.9	15.6	19.6	23.4	24.6	20.6	14.7	8.2	2.9	12.3
	降水量	34.8	53.5	90.3	98.0	158.6	163.8	204.0	192.4	230.6	126.7	90.3	35.6	1478.6
水戸	気温	3.1	3.9	7.0	12.3	16.5	19.9	23.6	25.1	21.8	16.4	10.8	5.7	13.8
	降水量	49.5	61.5	114.4	123.1	146.1	133.8	128.8	125.4	230.4	146.1	89.1	34.9	1382.8

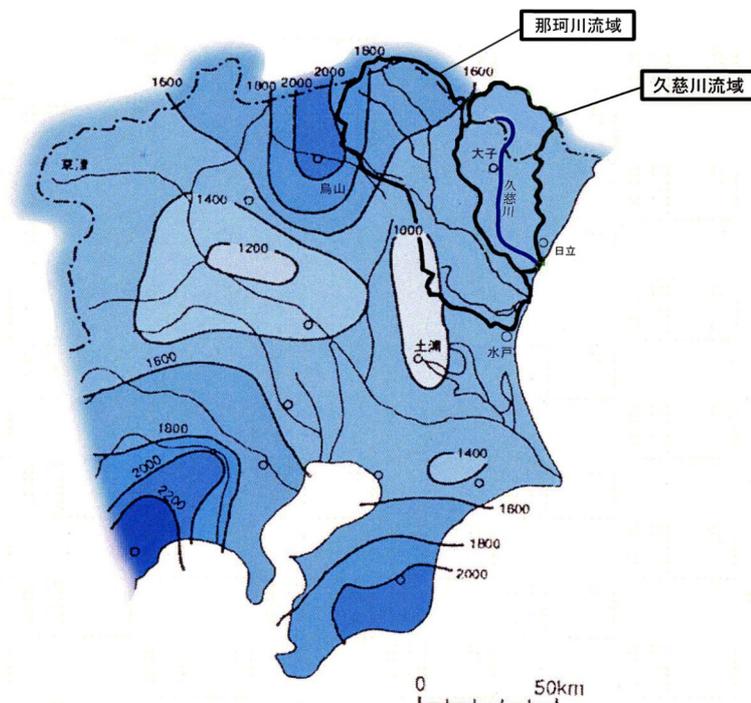


図 1-5 久慈河流域を含む関東地方の年間等雨量線図

(建設省河川局,「那珂川流域の概要 平成5年4月」をもとに作成)

(4) 人口

久慈川の流域は福島・栃木・茨城県の3県にまたがり、流域内人口は約28万人(平成12年度)である。人口密度は全域で180人/km²あるが、上流域で100人/km²、下流域で300~1,300人/km²であり、日立市、常陸太田市などの中核都市を擁する下流域に人口集中がみられる。

昭和25年から平成12年までの約50年間における流域市町村の全人口の経年変化は、表1-3のとおりである。流域全体では約7%の人口増加で、地域別には、上流域では35%、中流域では10%の人口減少になり、下流域で53%の人口が増加している。上・中流地域の過疎化と下流都市地域の人口増加が顕著となっている。

表 1-3 流域市町村の人口変化(昭和25年~平成12年)

	昭和25年	昭和35年	昭和45年	昭和55年	平成2年	平成12年
上流域合計	168,707	154,007	129,186	119,674	116,316	109,131
中流域合計	126,360	122,472	107,773	107,935	113,216	114,287
下流域合計	205,104	244,310	278,853	307,397	313,883	313,349
合計	500,171	520,789	515,812	535,006	543,415	536,767

(「国勢調査 昭和25年~平成12年」をもとに作成)

上流域：棚倉町、鮫川村、塙町、矢祭町、表郷村、黒羽町、馬頭町、大子町

中流域：里美村、水府村、山片町、金砂郷町、大宮町、瓜連町、高萩市、十王町

下流域：日立市、常陸太田市、東海村、那珂町

上表は、流域市町村の全人口の合計

上記の市町村のうち、最近以下の市町村において合併が行われた。

大宮町、山方町、美和村、御前山村 常陸大宮市(H16.10.16合併)

常陸太田市、金砂郷町、里美村、水府村 常陸太田市(H16.12.1合併)

那珂町、瓜連町 那珂市(H17.1.21合併)

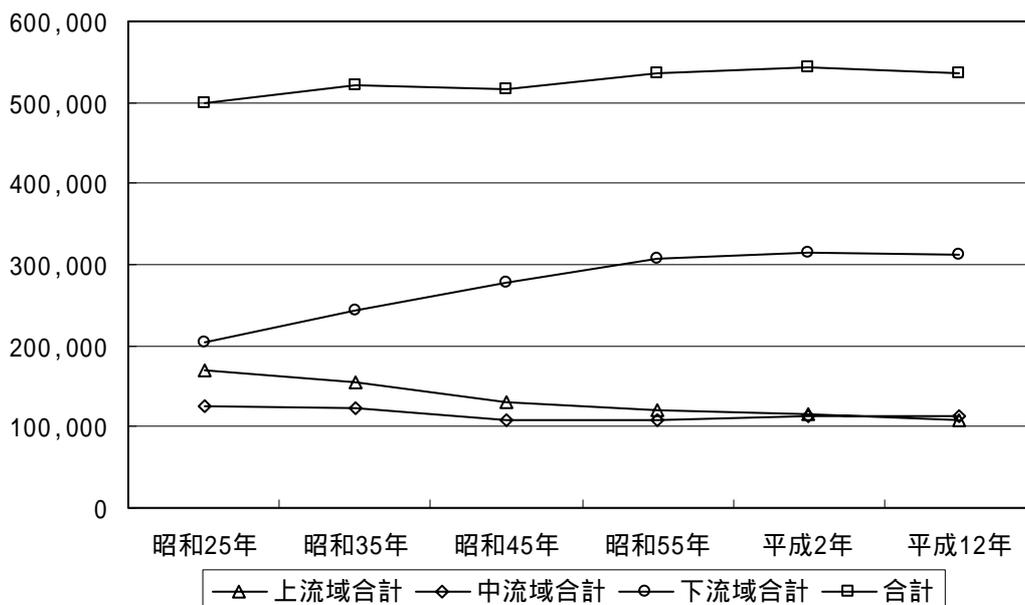


図 1-6 久慈川流域の人口変化

(5) 交通

流域の幹線道路は、久慈川に沿って南北に走る国道118号と里川沿いの349号、常磐自動車道、国道6号等によってネットワークが形成されている。鉄道はJR常磐線、JR水郡線、日立電鉄がある。その中でも水戸と郡山を結ぶJR水郡線は、久慈川沿いに川の景色をのんびりと楽しめる路線として知られている。



図 1-7 久慈河流域の主要交通網図

(6) 土地利用

久慈川流域の市町村面積は、福島県657.50km²、茨城県1,153.15km²、栃木県187.22km²で、地目別土地利用面積（平成7年）は、山林が約10万7千ha（55.8%）、田が約1万6千ha（8.4%）、畑が約1万5千ha（8.0%）、宅地が約9千ha（4.8%）で、その他が約4万4千ha（23.0%）である。

昭和45年から平成7年までの経年変化では、田、畑とも下流域での減少傾向がみられる。反面、宅地は上・中・下流域とも増加傾向にある。

表 1-4 久慈川流域関連市町村の地目別土地利用面積の変化（単位：ha）

		地目別土地利用面積 (ha)				
		田	畑	宅地	山林	その他
昭和45年	上流域	7,006	6,443	1,127	67,284	26,432
	中流域	3,697	5,034	904	19,461	14,092
	下流域	5,740	7,399	3,477	11,308	10,721
	流域合計	16,443	18,876	5,508	98,053	51,245
昭和50年	上流域	7,312	6,510	1,275	65,672	27,508
	中流域	3,793	4,872	1,049	21,715	10,482
	下流域	5,632	6,810	4,045	13,679	9,460
	流域合計	16,737	18,192	6,369	101,066	47,450
昭和55年	上流域	7,379	6,348	1,380	65,638	31,198
	中流域	3,815	4,603	1,190	22,148	11,463
	下流域	5,641	6,133	4,523	13,470	9,834
	流域合計	16,835	17,084	7,093	101,256	52,495
昭和60年	上流域	7,295	6,361	1,566	67,619	25,436
	中流域	3,778	4,303	1,303	23,167	10,677
	下流域	5,462	5,804	4,929	14,310	9,125
	流域合計	16,535	16,468	7,798	105,096	45,238
平成2年	上流域	7,320	5,870	1,715	61,456	24,305
	中流域	3,645	4,109	1,427	23,365	13,664
	下流域	5,331	5,624	5,179	14,147	9,342
	流域合計	16,296	15,603	8,321	98,968	47,311
平成7年	上流域	7,235	6,092	1,924	70,411	22,793
	中流域	3,564	3,915	1,650	21,959	11,857
	下流域	5,169	5,340	5,594	14,283	9,241
	流域合計	15,968	15,347	9,168	106,653	43,891

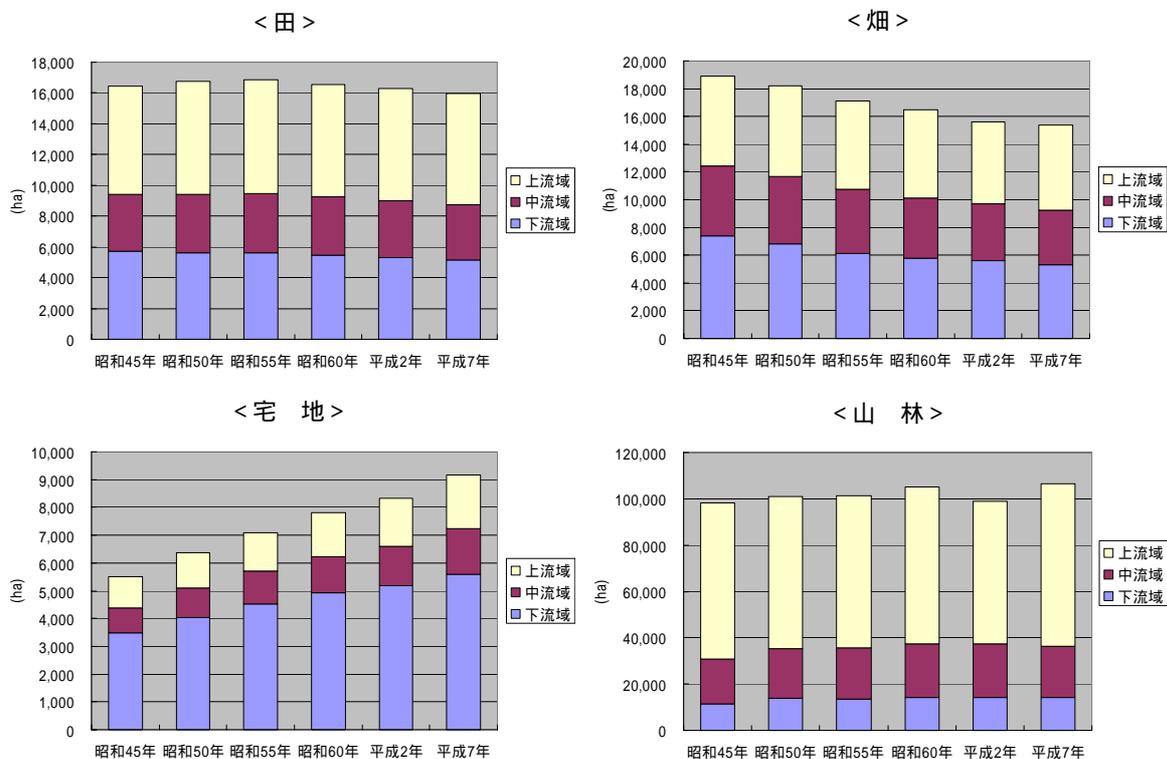


図 1-8 上・中・下流域関連市町村における地目別土地利用面積の変化

(7) 産 業

久慈河流域の市町村における産業別人口は、以下のとおりである。

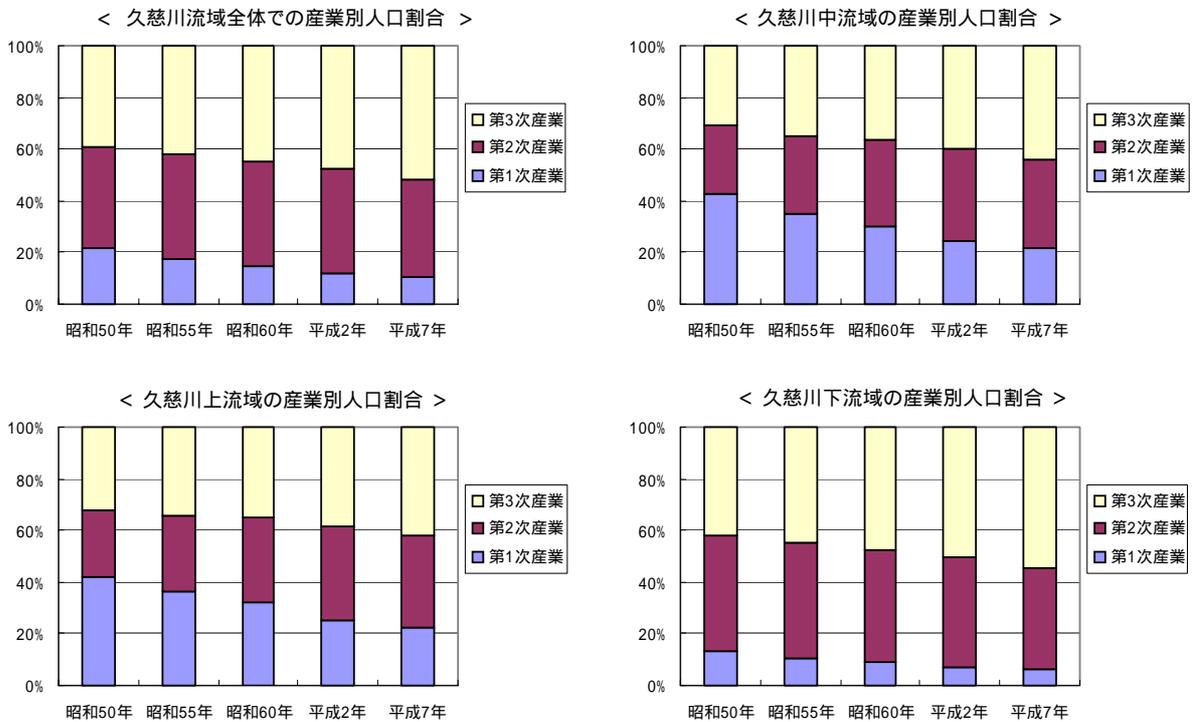
1) 産業別人口

久慈河流域の市町村における産業別人口割合をみると、流域全体では第1次産業の割合が減少してきており、第3次産業の割合が増加してきている。

上・中・下流域に分けて見ると、どの流域でも第1次産業割合が減少しており、第3次産業の割合が増加してきている。下流域では第3次産業の占める割合が大きい。

表 1-5 久慈河流域関連市町村の産業別人口の変化（昭和50年～平成7年）（単位：人）

		昭和50年	昭和55年	昭和60年	平成2年	平成7年
上流域合計	第1次産業	10,569	8,983	7,835	5,818	4,904
	第2次産業	6,399	7,331	7,960	8,459	8,002
	第3次産業	8,084	8,608	8,434	9,005	9,335
中流域合計	第1次産業	13,340	11,168	9,524	7,817	6,868
	第2次産業	8,510	9,827	10,531	11,084	10,698
	第3次産業	9,649	11,221	11,569	12,613	13,685
下流域合計	第1次産業	18,134	15,180	13,667	11,457	10,497
	第2次産業	62,597	65,588	65,915	67,712	64,963
	第3次産業	58,303	65,338	72,973	81,200	89,613
流域合計	第1次産業	42,043	35,331	31,026	25,092	22,269
	第2次産業	77,506	82,746	84,406	87,255	83,663
	第3次産業	76,036	85,167	92,976	102,818	112,633
総計		195,585	203,244	208,408	215,165	218,565



(茨城県「茨城県統計年鑑」、福島県「福島県統計年鑑」をもとに作成)

図 1-9 上・中・下流域関連市町村における産業人口割合の変化（昭和50年～平成7年）

表 1-6 流域内市町村の農業生産額・製造品出荷額等

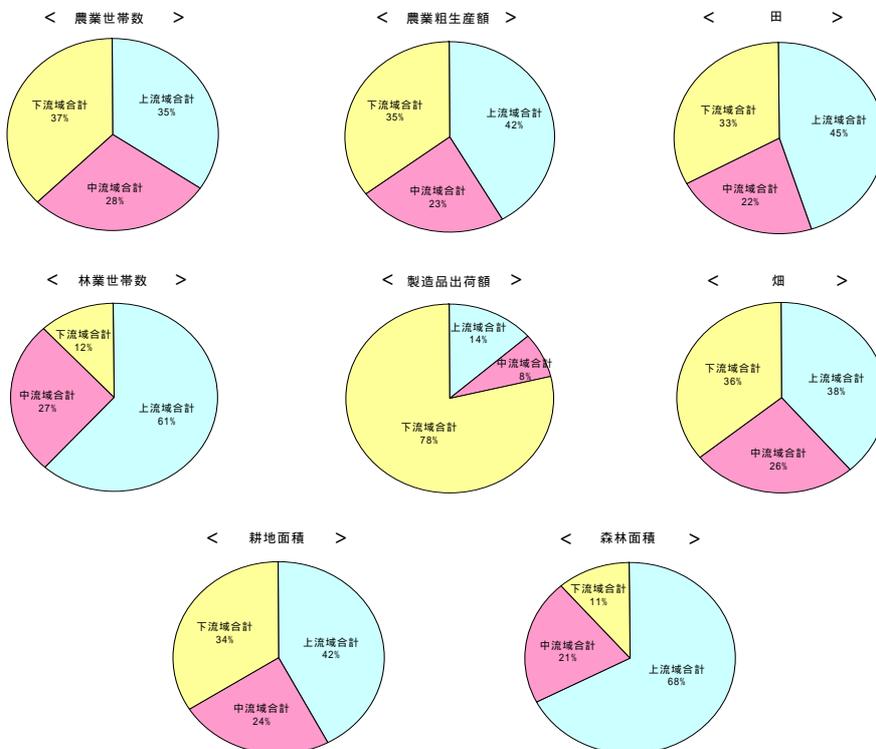
流域市町村	農家数 (世帯)	林家数 (世帯)	漁業数 (世帯)	工業事業数 (所)	農業粗生産額 (千万円)	製造品出荷額 (百万円)	田 (ha)	畑 (ha)	耕地面積 (ha)	国有林 (ha)	民有林 (ha)	林野面積 (ha)	森林面積 (ha)	第一次 (人)	第二次 (人)	第三次 (人)	
福島県	棚倉町	1,207	735	-	79	79	104,671	1,200	413	1,613	5,576	6,415	11,991	11,996	801	3,948	3,708
	蛟川村	753	618	-	15	218	3,556	718	795	1,513	3,536	6,464	10,000	9,532	582	1,104	717
	塙町	1,261	718	-	61	241	11,591	1,040	641	1,681	8,850	8,116	16,966	16,939	1,161	2,195	2,336
	矢祭町	937	556	-	34	177	41,660	484	450	934	3,061	6,433	9,494	9,505	751	1,609	1,239
栃木県	黒羽町	1,600	776	-	62	432	39,744	2,110	394	2,504	2,932	10,507	13,439	13,426	1,490	3,159	3,638
茨城県	大子町	2,829	1,809	-	84	355	27,673	1,140	1,410	2,550	4,987	20,712	25,699	25,599	2,628	4,409	5,450
	里美村	720	307	-	27	71	3,410	334	208	542	4,069	6,336	10,405	10,237	411	845	968
	水府村	985	491	-	31	87	1,912	292	487	779	1,626	4,251	5,877	5,825	742	1,090	1,436
	山方町	1,036	655	-	27	157	15,209	354	507	861	524	5,346	5,870	5,863	743	1,446	1,927
	金砂郷町	1,776	374	-	39	165	19,308	1,110	460	1,570	305	2,522	2,827	2,827	1,394	1,899	2,692
	大宮町	2,415	430	-	104	349	87,984	1,180	1,070	2,250	295	2,435	2,730	2,688	2,070	5,047	7,425
	日立市	1,447	374	204	599	115	1,172,902	464	224	688	3,522	3,924	7,446	7,443	1,530	36,234	51,792
	常陸太田市	3,137	347	-	83	344	32,485	1,740	762	2,502	2,233	2,785	5,018	5,018	2,214	6,173	11,358
	瓜連町	568	73	-	20	62	608	315	266	581		347	347	347	409	1,301	2,687
	那珂町	3,221	151	-	105	538	72,972	1,810	1,980	3,790	68	1,175	1,243	1,241	2,976	7,094	13,835
	東海村	951	61	3	71	219	35,949	560	578	1,138	127	566	693	693	933	5,566	10,814
	上流域合計	8,587	5,212	0	335	1,502	228,895	6,692	4,103	10,795	28,942	58,647	87,589	86,997	7,413	16,424	17,088
中流域合計	6,932	2,257	0	228	829	127,823	3,270	2,732	6,002	6,819	20,890	27,709	27,440	5,360	10,327	14,448	
下流域合計	9,324	1,006	207	878	1,278	1,314,916	4,889	3,810	8,699	5,950	8,797	14,747	14,742	8,062	56,368	90,486	
合計	24,843	8,475	207	1,441	3,609	1,671,634	14,851	10,645	25,496	41,711	88,334	130,045	129,179	20,835	83,119	122,022	

上記の市町村のうち、最近以下の市町村において合併が行われた。

大宮町、山方町、美和村、御前山村 常陸大宮市 (H16.10.16 合併)

常陸太田市、金砂郷町、里美村、水府村 常陸太田市 (H16.12.1 合併)

那珂町、瓜連町 那珂市 (H17.1.21 合併)



(農林水産省, 「2000年世界農林業センサス」、等をもとに作成)

図 1-10 流域内市町村の農業生産額・製造品出荷額等

2) 農林業

農業について、田畑の占める土地利用面積の割合は上流域の市町村で高く、これに伴い農業粗生産額も上流域の市町村での生産額の割合が中・下流域の市町村と比較して高くなっている。林業についても、上流域での市町村における森林の占める土地利用面積の割合が高く（68%）、林業家数も5,000世帯を超えている。

特に八溝山周辺では、大子町、棚倉町に営林署が設置されている。八溝山は地質的にもスギ、ヒノキの生育に適しており、良質な木材が生産されている。この地方で切られるスギは「八溝杉」と言われ、江戸時代に日本三大美林の一つと言われている天竜地方の「天竜杉」が移植されたとされている。

3) 水産業（内水面漁業）

久慈川ではアユ漁が盛んであるが、その他コイ、フナなども漁獲しており、またサケ漁も有名である。

久慈川における魚種別漁獲量の経年変化は表 1-7に示すとおりであり、昭和63年～平成12年まで、毎年漁獲量は伸び続けている。魚種としてはアユ（平成12年）が多く全体の50～60%を占めている。このアユ漁獲量は全国7位（農水省統計）であり、全国的にもアユ漁が盛んな川であることが伺える。

表 1-7 久慈川魚種別漁獲量（茨城県：昭和63～平成12年）（単位：トン）

	S63	H元	H2	H3	H4	H5	H6	H7	H8	H9	H10	H11	H12
あゆ	166	190	228	229	250	260	270	300	310	330	320	321	321
こい	36	40	48	50	55	55	60	61	61	62	63	63	63
ふな	30	35	37	38	38	38	40	40	40	40	45	46	46
おいかわ	17	20	22	22	22	22	22	22	22	22	23	23	23
さけ類	35	26	28	35	22	15	10	10	18	21	18	9	6
うぐい	14	14	16	16	16	15	15	15	15	15	16	16	16
その他	25	27	33	36	37	41	43	48	50	51	52	54	56
合計	323	352	412	426	440	446	460	496	516	541	537	532	531

（茨城県農林水産部漁政課、「茨城の水産」をもとに作成）

4) 商工業

工業については、臨海部に工業地帯が集積し、これを反映して製造品出荷額は下流域の市町村が78%を占めている。また、商業については卸売業及び小売業の年間販売額についても下流域の市町村が70%以上を占め、下流域に商業機能が集積している。

5) 地場産業

久慈川流域には、昔から地域の特色を持った産業が栄え、現在も各地で続いている。以下に代表的な産業を紹介する。

八溝わさび

久慈川に注ぐ八溝川上流の太子町上野宮は、わさびの産地として名高い。わさびは下小川村檜澤口の山横目であった百姓弥兵衛の先祖が水戸義公（徳川光圀）よりわさびと朝倉山椒をいただいたので適地を探しこれを植えたのが始まりであるという。わさびの生育には、夏でも涼しく、清らかな冷たい湧き水が欠かせない。水温は 13～17、直射日光の当たらない場所にわさび田は作られる。八溝山の湧水を得て、八溝川上流では衰退した林業に代わってわさびの栽培が行われている。わさびはわが国が原産で、全国の山野に自生している。わさびが用いられるようになったのは 919 年に著された「本草和名」に薬草として記されている。食用に供した記録は「著聞集」に、後堀河天皇即位の時（1221 年）丹波の国のわさびが嗜好品として献上されたとされている。

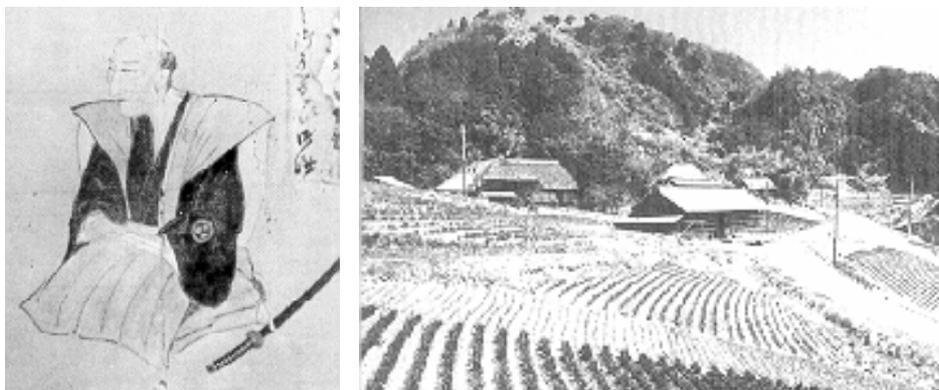
わさびは、アルカリからし油が食欲を増進し消化を助ける。また抗菌力が強いのでカビを抑え、鮭などには欠かせない日本の薬味である。

奥久慈茶

太子町左貫、中郷地区は古くから茶の産地として知られる。特に左貫、初原で生産される佐原茶は茶人には垂涎の的であった。左貫で茶の栽培が始まったのは 1593（文禄 2 年）ごろ、地元の文殊院の僧常庵が京都の宇治から茶の実を持ち帰って播種してからだと言われている。始めの頃は、天日製茶（日乾製）で品質悪く売れなくなったので、長貫村（常陸大宮市、旧山方町）の七郎平と小祝村（常陸大宮市、旧大宮町）の藤次衛門が、1807 年（文化 4）、水戸藩の許可を受けて宇治式製茶法を導入してから、それが太子地方に伝わり発展した。「奥久慈茶」（保内郷茶）の名で知られ、現在、太子町左貫には奥久慈茶の里公園が設けられ、茶摘みや、茶もみ体験などもできる。

こんにゃく

県北の久慈川に沿う山間地域の傾斜地は、砂礫質で他の農作物には適しなかったが、こんにゃくには適していたため、江戸時代の 1776 年（安永 5）、常陸太田市（旧山方町）の中島藤右衛門貞詮によって加工技術が考案され、長期保存と軽量化が可能になり、販路を大きく拡大した。水戸藩は袋田には蒟蒻会所を設け、農家にとっては大切な商品作物となり、郷土に大きな富をもたらしたとされる。現在でも久慈川流域では、こんにゃくが盛んに生産されている。



帯刀を許された中島藤右衛門（左）とその生家（右）

赤土たばこ

たばこは水戸藩の代表的な産物であり、水府たばことして有名だったが、なかでも赤土村(常陸太田市、旧金砂郷村赤土)産の上等品は「あかつち」と呼ばれて珍重された。流霞唱和集に「常州赤土、泉州芳野 等皆爲名品」とある。また色は「丹波大内、二ホヒ八ヨシノノ^{ヌツミ}眞摘、ハリマノ^と岐志計^{しけ} 常陸の赤土」とある。

現在も、常陸太田市(旧金砂郷町、水府村)、常陸大宮市(旧大宮町)などの山間部で、たばこは広範に栽培されている。